

やまぐち自然派宣言

共生の思想を深める①

近況から思うこと

表彰受賞者(団体)活動紹介

水・土壌環境保全功労者表彰

白井 啓二

野生生物保護功労者表彰

笹尾 克之

環境学習功労者知事表彰

伊藤 忠雄

黒田 義則

日本ユネスコ協会プロジェクト未来遺産登録

樺野川流域地域通貨・連携促進検討協議会

やまぐち県民活動パワーアップ賞

NPO法人ふるさと里山救援隊

山口きらめき財団理事長表彰

山口カブトガニ研究懇話会



共生



共生随筆

天然記念物「向島小学校の寒桜」

秋吉台の草原維持

島田川のウラギクの保全活動

第10回リレーミーティングニ徳地

やまぐち自然共生ネットワーク

平成 26 年 2 月 28 日

共生の思想を深める ①

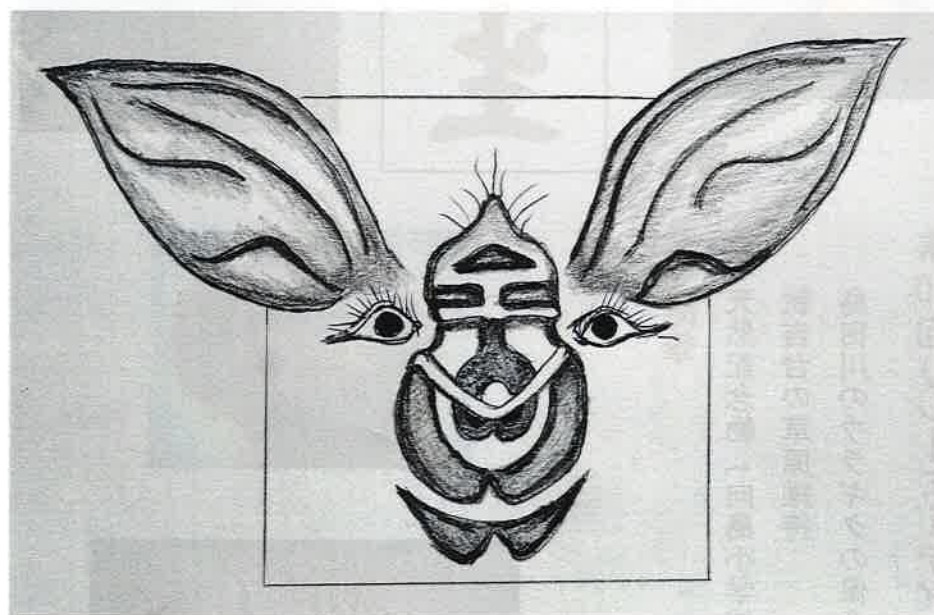
地球温暖化をめぐって

地球温暖化は人間活動に伴って大気中の温室効果ガスの増加により、地球の気温が平均的に上昇することをさす。

現代文明の置かれた状況を病気にたとえると、それは慢性の生活習慣病で、放っておくと、どんどんひどい症状が出る可能性がある。

江守正多、二〇一三「異常気象と人類の選択」(角川書店より)

地球温暖化は生物の生存や人類の問題に大きな影響を与え続けている。私たちは、今こそ人類の運命を左右する地球温暖化問題を議論し、正しい対策を取るようにしたい。



「人の目を入れたコウモリ」

近況から思うこと

開村修三

最近とはかく歩くことにしている。時には足に重りをつけて自分自身の脚力の増強を目指している。歳もとつてくると脚力増大にながるかどうかは期待しすぎてもいけないが、今年の九月には視覚障害者の全国交流登山が、会津磐梯山・安達太良山で実施されるので、それに備えて頑張っているつもりである。

日頃は
月一回(第
二日曜日)
周南市内
の万葉の
森を、視覚
障害者の
方々、がん
患者の人
々、統合失
調症の方、
視覚・ろう
あ、若い
男性、ボラ
ンタイア



の人々が加わって、ちよっとした山を楽ししくウオーキングしている。途中では木々の名前や、由来、草花、鳥の鳴き声から鳥達のことなどを、時にはかなり丁寧に説明したりしながら、共有する時を楽しんでいる。周南周辺の方には勿論、柳井・光・宇部・小野田・美祢などから参加されて、月一回ではあるが楽しみにしている。

ところで、歩いていると日常身辺で異常ではと思うことがある。自分の住んでいる近くの櫛ヶ浜漁港へ至る川で、ボラの身体におおさのりをべったりとまとったものはいくつも泳いでいた。その抵抗で余り速く泳ぐことができない様が見られた。そのことを土地の人に話すと、いろいろな原因が考えられると、



さらに川の石組みにカキが全然ついていない、その川から少し離れた漁港周辺にはカキがついていると言われた。また鉄道線路には草木が生えないように、しっかりと除草剤を撒いていることなどを、熱っぽく漁港近くのお年寄りが語ってくれた。

最近は見えた目には海もきれいになってきたように思われる。特に冬場は以前のようにきれいになって来たのかなと甘い点数を付けたくなるが、まだまだ見かけ上のことだけかもしれないぬぞと関心を持ち続けている。

昨年は周南市の山間地(金峰)で大変な事件が報道された。亡くなられた方の中に知っている方もおられた。あまりにひどいことだと誰しもが思われたであろうけれど、数年前にその予兆を聞いていただけに、早く手を打てなかったのが残念というか悔やまれる。

その際に、その時は容疑者だった男の身柄が山中で確保されたのとはほぼ同時に、男が飼っていた犬が心臓発作で突然死んだという。犬は犬なりにくたくたになるまで心労困憊していたのだろう。犬と人間との結びつき、犬自身の特性を知るのに事件が悲惨な事件であったので、再認識させられた。人と人、自然と人との関わりの大事さを考えさせられる事件であった。

表彰受賞者(団体)活動紹介

水・土壌環境保全功労者表彰

錦川流域ネット交流会 白井啓二

このたび、環境省水大気環境局長より水・土壌環境保全功労者表彰を受賞しました。身に余る光栄でございます。錦川流域ネット交流会で、平成二十四年六月に、環境大臣表彰を、翌年の平成二十五年二月には、地域づくり総務大臣表彰を受賞しました。錦川流域のみなさんが、錦川の環境保全や、地域づくりに尽力されたことがこの表彰に繋がったのだと思います。

私の錦川の環境保全のきっかけとなったのは、平成十一年五月に本屋で「結の心」という一冊の本と出会ってからです。一晩で読み終え、あくる日には、その本の著者である、宮崎県綾町の助役三期、町長を六期、町づくりに三十六年務められた、郷田實先生に電話をし、その週の土曜日には郷田先生のご自宅にお伺いし、一晩お酒を飲みながらじっくり話をお聞きしました。

かつて「夜逃げの町」「人の住めない町」と言われた過疎の町を、現在は、綾町を訪れる人は年間百二十万人、「照葉樹林都市」「有機栽培の町」「一戸一品運動の町」、そして、

一人ひとりの町民が生活文化を楽しむ町へと変貌。観光客はもとより、村起こし、町起こしの先駆的モデルとして学びに訪れる人も後を断たないそうです。「町づくりとは何か・本物の行政とは何か」行政への寄りかかりを排して、住民一人ひとりの自主・自立の心をよび覚ます「自治公民館運動」の展開によって過疎の貧しさから抜け出し、結の心で町を蘇らせた「郷田町政」二十四年間の話をじっくりお聞きすることが出来ました。それから、何の興味もなかった私の活動が始まったと思います。

郷田先生が「照葉樹林があるから綾川はきれいなんです。黄金のアユが泳いでいます。日本一きれいな川ですよ。」と言われたのですが、いつも錦川を見て育った私にとっては、そんなきれいな川ではありませんでした。「先生お言葉を返すようですが、私たちの町には、錦川という大変きれいな川があります。ぜひ、一度見に来てください。」それからしばらくして、先生が錦町にお越しになられました。「いやはや、きれいな川ですね。これが日本の原風景です。すばらしい」錦ふるさとセンターで町民二百人の前で「町づくり」の講演をしていただきました。あくる日、お帰りになるときに「まちがいなく錦川は日本一きれいな川です。でも、ほっておいたらす

ぐに汚い川になります。あなたがた、若い人たちが、汗を流し、楽しみながら守っていただく下さい。」そう言い残しお帰りになりました。その一カ月後に、八十一歳でしたが、お亡くなりになりました。あの言葉が遺言だったのかもしれない。当時、商工会青年部長を務めていたので、「錦川清流委員会」を立ち上げ、錦川の河川清掃が始まりました。

その後、錦川の環境保全のグループが結集し「錦川流域ネット交流会」を立ち上げ、流域全体の環境保全が始まりました。郷田實先生と、錦川流域の多くのみなさんのおかげで今回の表彰を受けることができました。本当にありがとうございます。



野生生物保護功労者表彰

日本野鳥の会山口県支部 笹尾克之

平成二五年五月一二日。環境省・(公財)日本鳥類保護連盟・奈良県主催、文部科学省・林野庁後援の第六七回愛鳥週間「全国野鳥保護のつどい」が、常陸宮同妃両殿下ご臨席のもと、奈良県橿原文化会館で開催されました。

南川秀樹環境事務官、矢島 稔(公財)日本鳥類保護連盟会長、荒井正吾奈良県知事による主催者あいさつ、来賓、河野洋平百人委員会会長あいさつの後、常陸宮殿下のおことばがありました。

続いて、野生生物保護功労者表彰。

総裁賞(一件)・環境大臣賞(六件)・文部科学大臣奨励賞(二件)・林野庁長官感謝状(三件)・(公財)日本鳥類保護連盟会長賞(三件)・環境省自然環境局長賞(六件)でした。

私は環境省自然環境局長賞で、受賞理由は「平成六年から小学校における自然観察や野鳥保護の指導に尽力。」

「平成一九年から山口県鳥獣保護員として鳥獣保護行政の推進に尽力。」

「平成二二年から山口県野生鳥獣調査団の

事務局長として、鳥獣保護区等指定効果測定調査などの活動に貢献するとともに、ガン・カモ類、シギ・チドリ類の一斉調査を実施。」とのことでした。

県内の小学校・緑の少年隊での指導や探鳥会の開催、自然観察指導員としての活動が認められたようです。

表彰式のと、生駒市立緑ヶ丘中学校の生徒二名による野生生物保護活動発表が行われました。

「自然観察から学んだこと」と題して、学校周辺の野鳥観察を中心にした愛鳥・野生生物の保護活動や河川の水質調査結果などの紹介でした。「プロジェクト」が作動しないというアクシデントの中、落ち着いた発表に感銘を受けました。

つづいて、橿原市少年少女合唱団の「旅の白鳥」「はばたけ鳥」の合唱がステージに華をそえ、会場ロビーの「万葉集に詠まれた鳥」を題材とした、高校生が描いた絵画の数々は圧巻でした。

式典終了後、橿原ロイヤルホテルに場所を移し、常陸宮同妃両殿下もご臨席され、和やかに愛鳥パーティーが開催されました。

この席で前記中学生二人に常陸宮妃からね

ぎらいのお言葉があり、緊張の中にも清々しい受賞の一日となりました。
今後ともできうる限り指導、調査等を行っていきたくと思っております。



第67回愛鳥週間 「全国野鳥保護のつどい」 野生生物保護功労者表彰受賞記念
平成25年5月12日 橿原ロイヤルホテル

環境学習功労者知事表彰

豊北町自然観察指導員会

伊藤忠雄

昭和二〇年、終戦という日本の大変革期に学生時代を過ごし、政府が「もはや戦後ではない」と宣言した昭和二〇年代の終わり、わたしは中学校理科の教職に就いた。

振り返ると、初任のころに感じた自然観察など課外活動への一貫した思いが、理科で言う第二分野(生物・地学)を選択させ、退職までの自分を支えたと思う。その四〇年間でも、とりわけ角島という稀有な自然のなかで教鞭をとり、地域の人たちとともに環境保全・保護活動が実践できたことは、自分にとってこの上もない幸運であった。

退職後も地元の歴史民俗資料館に勤める傍ら、北浦の自然公園指導員として地域の景勝地・指定地を巡り、「自然と歴史の宝庫」での活動を続けることができた。

そして平成五年、角島架橋プロジェクトの進行に合わせて、角島地域の自然環境の現状を知り、保護・保全・活用に貢献したい同士と「豊北町自然観察指導員会」の立ち上げとなった。以来実施した自然観察会は一一〇回を超える。「角島の海は青かった橋が架かっても角島であって欲しい」など参加者の言葉が

強い力添えとなっている。

いま灯台公園で

咲き誇っている水仙も、平成九年、

自然観察指導員会

が核となり、地元

の人たちと一緒に、

県道予定地の自生水仙を保護移

植したものであ

る。地域づくりから十数年経って人

々の思いが立派に

花開き話題となってきた。

平成一〇年、こうした活動を励ますように、

海からの巨大な贈り物があった。後に新種ツ

ノシマクジラと命名された鯨の漂着である。

まるで建設準備中の自然館のシンボルとなる

ことを知っていたかのように現れてくれた宝物である。

平成一二年、角島大橋が開通し青い海の上

を走り抜ける爽快感は、建設時と変わらず多

くの来訪者を引き続けている。

平成一五年、つのしま自然館開設、ドーム

にはツノシマクジラ十三mの骨格レプリカが

泳いでいる。展示物には写真・標本・種類目



録など、手作り資料が採用された。開設に伴い指導員会活動の拠点として情報発信・収集に勤めている。

平成二五年、つのしま自然館が一〇周年を迎え、その式典のなかで成果を総括する機会を得たが通算百回を超える自然観察会の開催と『角島自然観察ガイドⅠ・Ⅱ』を刊行し、あとに続く人たちへのメッセージを、これらの資料に込めたことが最大の成果といえるかもしれない。

最後に、いつまでも白い灯台の映える青い海緑豊かな角島であって欲しいと願いつつ、現職時と退職後の二度、活動の場を与えてもらえた角島とお世話になった多くの方々から感謝いたしたい。



環境学習功労者知事表彰

山口県自然観察指導員協議会

黒田義則

山口県自然観察指導員協議会は、昭和六一年（1986年）十一月に発足し「自然観察から始まる自然保護」を合い言葉に、二八年目を迎える自然観察指導員の集まりです。

発足以来、自然観察会・自然環境調査、目的を同じくする他団体との協力・援助・交流、講習会・講演会並びに研修会等の開催、自然環境の保護復元等の自然保護に関する実践活動を目的として活動してきました。

当会が近年行なっている継続的な活動を時系列的に紹介しましょう。調査活動では、平成一四年～一七年・海岸性植物群



落調査を各地で実施。

平成一七年まで…クサフグ産卵定点観察（笠戸島）。

平成一八年から…切戸川水質調査・定点観察。平成二一年から…セミの抜け殻調査（吉香公園で定点調査）。

平成二五年からは貝殻調査、田んぼの生きもの調査。

平成二六年から…タンポポ調査の予定。

自然保護活動では、

平成一七年まで…ナベツルのねぐら整備活動。

平成一九年から…カタクリ保全活動及び環境

学習会

（寂地

山）。

平成二〇

年から…

ヒゼンマ

ユミ保全

活動（下

関市蓋井

島伐竹作

業）。

平成二一

年から…

セツブン

ソウ保全



活動（錦町）。

これらの保護活動は山頂・へき地での倒木整理・伐竹・笹切り等の重労働が多くボランティア活動継続の為に若い会員の育成が急務です。

緑の少年隊自然観察指導員派遣事業では各小学校への指導員派遣、緑の少年隊交歓大会など次代を担う青少年の育成に積極的に参画してきました。

本部・各支部（第1～6支部）を合わせると、各地で観察会・研修会・講習会等を年間三〇回以上行っています。

規約では「自然観察指導員及び本会の目的に賛同するものをもって組織する」と有ります。当会への入会、各種行事への参画を希望する方をお待ちしています。

さて、自然保護に関しては、関わった時間に比例するかの様に難しさを実感しています。誤った自然保護も散見される昨今ですが慎重に本質を議論しながら前進して行きたいと思えます。また、人間が関わることで保全されていた里山・自然林の崩壊が顕著な現状をどのように改善するかが今後の活動の重要な課題だと思っています。

当会会員皆様方の日常活動の成果が今回の受賞に繋がったものと感謝申し上げます。

日本ユネスコ協会 プロジェクト未来遺産登録

榎野川流域地域通貨・連携促進検討協議会

岡 秀雄

昨年一二月、榎野川の流域連携活動が、第5回プロジェクト未来遺産一〇件のの一つに選ばれました。

「未来遺産運動」とは、公益社団法人日本ユネスコ協会連盟が「一〇〇年後の日本に残したい自然がある。伝えたい文化がある」をキヤッチフレーズに、自然とともに生きる知恵や工夫の中でつくりあげてきた自然遺産等を未来に伝えていこうという人々の意欲を活性化させることによって時代を切り拓いていくことを目的とし、実施されています。

私たちの団体は、多くの関係者と調整、協議しながら、榎野川流域連携活動の代表として昨年申請に至り、自然分野において、山口県初の登録となりました。

この未来遺産登録に際し、これまでの軌跡を振り返りながら、これからの活動について考えたいと思います。

平成一三年、榎野川最大支流の仁保川の最上流端に、産業廃棄物処理場建設の動きが台頭した際、地元仁保自治会が立ち上がり、「榎野川の源流を守る会」を設立しました。その

後、僅か二〇〇日余りで一三〇〇万円を超える浄財を集め、全額を山口市に寄付し、当該土地約5畝を買収して、これを「四季の森公園」として整備することとなりました。

この整備事業に積極的に参画されたのが「榎野川流域活性化交流会」です。当時の山口漁業協同組合、嘉川漁業協同組合の呼びかけにより平成一二年に発足した当該会は、山口中央森林組合、榎野川漁業協同組合、山口中央農業協同組合、山口市などが参画して流域全域を網羅して、総合的に環境保全活動を展開しておりました。

初めての作業の際、海の男達が、大漁旗をはためかせながら仁保の山奥で植栽作業を行ったことや、

連合山口等のボランティアの皆さんがお子さんと一緒に参加され、山の中に子どもたちの笑い声が響き渡るなど、記憶に残る数多くの取組が生まれました。



これらの継続的なボランティア活動により、一五樹種一七〇〇本余の植樹、下草刈りなどが実施され、四季の森公園は、清流を湛えながら四季折々の魅力をもつ、森・川・海の活動の原点となり、後世に引き継ぐ場所となっております。

榎野川の源流を守る会に賛同し、活動に参加していただいた方に「ありがとう」の気持ちを伝えるには、どうすればよいか・・・活動の輪が広がるにつれ、このような想いがつづてきました。そこで、平成一五年に山口県で策定された「やまぐちの豊かな流域づくり構想（榎野川モデル）」のプロジェクトの一つでもある地域通貨の取り組みを模索し始めました。関係者と協議の結果、組織改編により、当団体を立ち上げると同時に、ボランティア活動の参加者に対し、感謝の印として、地域通貨「フシノ」を交付し、榎野川流域の協力店で、料金の一部として使用できるモデルを作

